

(続紙 1)

京都大学	博士 (農 学)	氏名	上田 祐未
論文題目	An Ethnobotanical Study on Folk Taxonomy and Uses of <i>Mangifera</i> Trees Grown in Southeast Asia (東南アジアに生育する <i>Mangifera</i> 属樹の方名と利用に関する民族植物学的研究)		
(論文内容の要旨)			
<p>アジアの熱帯地域を原産とするマンゴーが含まれる、ウルシ科 <i>Mangifera</i> 属の植物は多様で、東南アジアでは栽培・野生にかかわらず多くの樹種が利用されている。しかしながら、これらの多くについては、伝統的にどのように利用されてきたか、都市化やグローバル化が進行する中で伝統的な利用がどのように変容を遂げているか、ほとんど知られていない。本研究は、タイ北部・東北部、ラオス北部・中部、ベトナム北西部、ジャワなど東南アジア各地で生育する <i>Mangifera</i> 属樹種に関する民族植物学的研究を行った結果をまとめたものであり、次の各章からなっている。</p> <p>第一章は序論であり、<i>Mangifera</i> 属樹種に関する起源、分布、形態的特徴などの基礎的な研究の背景及び目的を示すとともに、本論文の構成について記述している。</p> <p>第二章では、東南アジア大陸部を中心に広域に分布する <i>Mangifera caloneura</i> Kurz に二通りの種記載が存在することを文献に基づいて明らかにしている。<i>M. caloneura</i> には、稔性のある雄蕊に関する記載に混乱があることを整理し、最初の記載である Kurz (1873) に一致する、稔性雄蕊数 1 本とする記載に基づいた種同定をすべきであると結論づけている。</p> <p>第三章では、東南アジア大陸部の <i>Mangifera</i> 属樹種を対象に広域調査を行った結果をまとめ、タイ東北部、ラオス北部および中部、ベトナム北西部に分布する <i>Mangifera</i> 属 260 樹を樹形と葉の形態的特徴によって 4 分類し、それらの方名と利用を明らかにしている。この中で、タイ東北部で <i>kalon</i> マンゴーとよばれる樹種が人々に好まれ高頻度で利用されていたものの、明確な種同定がなされていなかったことを示している。</p> <p>第四章では、タイ東北部の <i>Mangifera</i> 属樹種を詳細に調査し、<i>M. pentandra</i> が高頻度で分布し、種内で <i>paa</i> マンゴーと <i>kalon</i> マンゴーに区別されていること、さらに樹形、樹皮、果実において顕著な種内変異が認められることを示している。<i>kalon</i> マンゴーと <i>paa</i> マンゴーには、果実・樹形・葉などの形態に大きな相違があるのに加え、多くの <i>paa</i> マンゴー樹は大木で、田畑の中に分布していた一方、<i>kalon</i> マンゴー樹は小さく、住居周辺に分布する傾向があることを明らかにした。このことから、<i>paa</i> マンゴーは自然植生の一部が残されたものであり、<i>kalon</i> マンゴーは比較的近年に植栽されたものと考えられること、<i>kalon</i> マンゴーは意識的または無意識的な選抜によって生み出された優良系統であることを結論づけている。</p> <p>第五章では、タイ北部に分布する <i>Mangifera</i> 属樹種を調査し、<i>M. caloneura</i>、<i>M. pentandra</i>、<i>M. sylvatica</i>、<i>M. linearifolia</i> と推定される 4 種が生育していることを確認し、<i>M. caloneura</i> には 5 種類の、<i>M. pentandra</i> には 3 種類の方名があることを明らかにしている。<i>M. caloneura</i> と <i>M. pentandra</i> では大きな種内変異があるにもかかわらず</p>			

ず、ほとんどの種内変異が地域の人々によって明確には識別されていないこと、*M. caloneura* のうち細長い形の果実をもつものが明瞭な方名によって人々に認識されていたが、品種として確立されるには至っていないこと、意図的な保護や優良系統の栽培も確認されなかったことを見出している。

第六章は二節からなり、第一節はインドネシア・ジャワで、第二節はタイ南部の *Mangifera* 属樹種を調査した結果を示している。いずれの地域においても *M. foetida* 及び *M. odorata* がホームガーデンや果樹園の隅などで栽培されていたこと、ジャワでは、*M. odorata* および食味のよい *M. foetida* がいずれも *keweni* として認識されており、植物学的な種分類と一致しないこと、一方、タイ南部で使用されている *keweni* あるいはそれに類する方名には、*M. odorata* しか含まれていないこと、そのため、タイ南部の方名による分類は植物学的種分類と一致していることを示している。また、第六章第二節では、*Mangifera* 属樹種の民族的分類を通して、「人-植物関係」の地域による違いを考察している。タイ北部の *Mangifera* 属4種はいずれも野生食用植物として人びとに利用され、その種内変異もほとんど識別されておらず、その「人-植物関係」は最も希薄であること、タイ東北部では野生の *M. pentandra* のなかから優良系統と思われる *kalon* マンゴーが地域の人びとにより半意識的に選抜され、その「人-植物関係」はタイ北部より濃密であること、タイ南部では、*M. foetida* と *M. odorata* はすべて地域の人びとによって栽培されており、その「人-植物関係」は、タイ東北部よりさらに濃密であることを示し、さらに、タイ南部の *M. indica* 以外の *Mangifera* 属樹種にはまだ品種は確立されていないこと、*M. indica* 以外の *Mangifera* 属樹種の果実利用もさらに進めば、*M. indica* のように選抜や育種が始まり、より優良な品種の確立に至ると考えられることを示している。特に、タイ東北部の *kalon* マンゴーは、他の野生型の *M. pentandra* とは区別できるほどの明瞭な差異が観察され、まさに栽培化が始まりつつあることを示している。

第七章では、本研究の成果をまとめており、調査地各地において人々の生活圏内に頻出する *Mangifera* 属樹種とその方名を地図上に示し、さらに、本研究の成果が、*Mangifera* 属樹種の利用に関する在地の知識を後世に伝える記録として役立つことを示している。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し

審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

Mangifera 属樹種は、栽培化され世界各地で広く栽培されているマンゴー (*M. indica* L.) を除いて、アジアの熱帯・亜熱帯地域のみ分布しており、各地域では果実を中心に利用されているが、特に東南アジア大陸部においては、在来利用法やその知識について研究例がほとんどなく、その「人-植物関係」の詳細は知られていない。東南アジア大陸部では、近年、経済発展に伴う自然植生の減少も顕著であることから、野生果樹の個体数の減少や利用の衰退が懸念され、現在の野生果樹の在来利用についての知見を得ることは急務となっている。本論文は、タイを中心とする東南アジアの各地域において、*Mangifera* 属樹種の方名や利用について詳細に調査したことに加え、野生果樹の栽培化初期段階を明らかにした点で意義深い。本論文の評価できる点は以下のようにまとめられる。

1. 人々の生活圏で頻出する身近な *Mangifera* 属樹種 (*M. indica* L.を除く) の方名や利用、形態的特徴を、東南アジア各地における現地調査によって、詳細に明らかにした。

2. タイ東北部の *M. pentandra* Hook. f. は、地域の人々によって2種類に区別され、それらが形態的な差異によって識別可能であることを示した。さらに、果実の大きさや食味において優良な *kalon* マンゴーと呼ばれる樹種は、さまざまに利用され、住居周辺に分布する傾向があることを示し、地域で選抜された優良系統である可能性を指摘した。

3. *Mangifera* 属樹種 (*M. indica* L.を除く) の利用や「人-植物関係」は地域によって異なり、それらを比較することにより、果樹の栽培化の進行過程を考察し、意義深い推論を行った。即ち、タイ北部では、野生の *Mangifera* 属樹種が分布するものの、種内変異が地域住民によって共有されることはなく、利用も単調であったのに対し、タイ南部やインドネシア・ジャワでは2種が小規模ながらも栽培下にあり、タイ東北部では *kalon* マンゴーのように地域の人々が見出したと考えられる優良系統が独自に進化していることを示し、*Mangifera* 属樹種の栽培化が、東南アジアの各地でそれぞれ独立に進行していることを明らかにした。

以上のように、本論文は東南アジアにおける *Mangifera* 属樹種 (*M. indica* L.を除く) の分布と利用の現状を詳細に示し、在来果樹の利用や野生果樹における「人-植物関係」を明らかにした。この成果は、熱帯農業生態学、民族植物学、果樹園芸学の発展に寄与する。

よって、本論文は博士(農学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成27年7月10日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士(農学)の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注) 論文内容の要旨、審査の結果の要旨及び学位論文は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。

ただし、特許申請、雑誌掲載等の関係により、要旨を学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降 (学位授与日から3ヶ月以内)